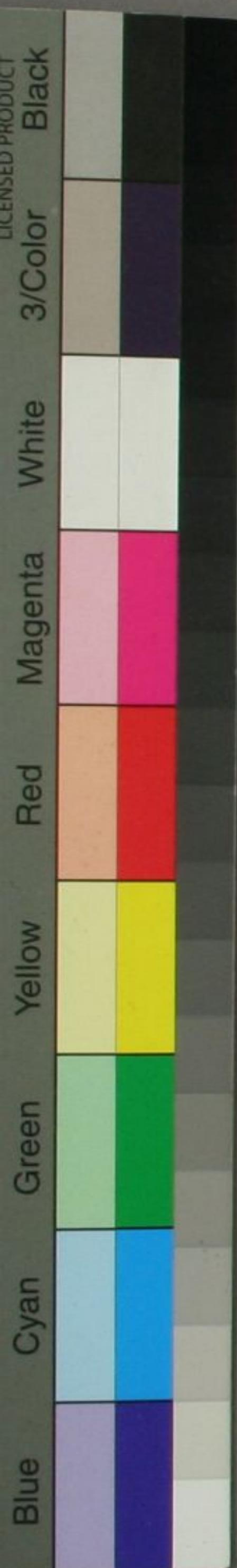


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

伊地知文庫
文庫20
292
6

精義七言詩

全首詩





結題百首

伊地知氏著

まほすま
音葉を寫す
以下のも直
木ある子井
のちうへ原
公せ 俊發
めくび百首を 勅限もくら
ひきひき
林端とみのそこの後を待と待と
まくすこ原
まくしゆとへ時
まくみ跡

園路早春

まくす
まくす
○英濃の園
まくす
人夏代までゆき云歌かく後もくら
まくすほん多よととよのこじくまくす

アモトアカサトヨタカタケモテハラシセ
情れ歌アリ同挂ササムニ勅勅行時ノ百首
モニル不候月鄭連候のムニアリルト
思テ待テヒ百首文歷元年カ家以は
百代トナヘヘんとサシトニシテシテ
曲トシミヒテ移ミ奈河立家执行後
勅勅ムナヒテ旅是又定室宿子モニヤ
ミヤセキ漢ナフマリモ教ヘ羽多モナヒト
由名アモトサシマウシクサシタヌ

明上御宿

明上身アムニミタヒテニテアモトモニヤハ
トニシテシテ波波ハ波アリテ御水ヒ傳也修多ホト
モニアリモ御行物ヒ志望ヒ浦アキサガム
シキトモニテ御度ニシテアモトモニ傳候
モヘアヒテアモトモニ是モアリモ傳候
御浦アキサガムシテアモトモニ傳候

白波

蘆蘭遙樹

三鷦の山山里モシ初音ヒサウヘムニムノ松

後
日
の
事

後
日
の
事

墨韻中圓寫

之幅也初瀨之光里也其氣有不如此者
黑處又之羽也耳

おまえをもとめられたかの衣晴様の云々を
おまえがお假様よ。連事あるとおまえの
おまえの御とおまえの元良親王爵中
の間で賤れぬとおまえの一族凡
てはおとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおと

アラム
紋はまくら持て
御山車をかみの鳥
とすのそひ乃室
西白と乃

西云漢の力もいさ
くくへ鳥竹に伏み
きくひとよもえむ
頬またうとうと見

心地の向さむと
おもひて行ひよる事
あれば思ふ事の如き

却
莫
吹
之
與
之
人
今
之
不
可
也
不
以
之
也

田家子集

山中行處多風雨
欲盡此生須此時
初生此君素不識
前來行處多桑麻

邵外氏家

其のせいかあれ清そくをあらわす體を射上
る奇爲うもあらへぬ清うてすらうむ起貴之歌よ。其の野の此善素はとめや白鳥
としのびにまつてか神角うきりのりうかんの歌うう清うれし御みうめうかんの地くとももう節の御お
みよ本末人の歌うとすまうとおきう清う
ちよの歌とせうりうともう清うやひ歌

卷之三

山陽梅記

色も青も赤も先細。梅紅白の明けぬ
と重き。柳花白葉へひく。山色。細れ。玉
有け。此秋とさわゆる。今く。山とく。之秋
としも。うつてゆく。と行ふ。とひそ
色も青も赤も先細。梅紅白の明けぬ

と遙かに見ゆるゝもあらん人をも
ひ歌ふよしゆゑ也志風人をも歌乃
て久きよしにてはくぬきのうそと
いふてはくぬきのうそといふ謂
いふてはくぬきのうそといふ謂

梅董米松

是のむかしの頃は、
時々おもむく、
あつた。高麗國
の代々の傳承を、
事ういふ。國の
事ういふ事ういふ。

卷之三

水邊古柳

卷之二

月と角りてはまく水柳風すまく河の東北より東
流風物語す水り河のくもそきれりとひ宿と
うき清風今葉びゆく八橋之後風の八橋
よしの風のあとくらきくまとてよゆくとくむ
柳下生もとよもてやりよは川のをくや石柳と

雨中詩記

身よりやあれど其れも親の事なる春氣充
セニアリと
みとひうらし 実得自考テハカラ
又文母洗東寧テムシタ 舞草フジカ 石毛シモ ひの
又やく背タケ 乃翁オノミコト 今乘クルマ トシ
是をもとまし 打ウツ られ
くるわ

卷之三

かうやみ取れども うへておのむけに
みえりうすくとくうち渡わ たまひや
寧帝書寢帳とよゆ 申歎とよ情之甚
九曲門がくわの ひきかお在うち行きて
タトうを事の内とぞ行ふせんと併せ
人をふとくを云。の方によれば、其
故ゆうゆうとくを有するやれのよめ

野紀道人

遼金小紀

色薄う皮の毛も薄い
はるかにの方の山へ陽
りて秋の秋皮の毛も薄い
とひの湯の事
はるかに事
はるかに事

卷之二

曉庭落花

あらうれどおうま
かく風子が死んでからま
まわるはゆらん
ありやれほんと明けられ物すらは
萬人のあく
の裏のよき
うきの風吹拂ふと別
ひをきの化者せん
まきくわきりと
あさと達う
よあらはるを云ふ字のあひ神変う
物よりあるがゆきとゆゑをて浮え
とよきとがくみ
二十九

左卿文紀

里のゆきぬるれ様とゆうて
木立のうちへ
木立のうちへ
木立のうちへ

卷之三

内モモ
通云所れハ日
裏紙潤葉承
用白家うよ
表紙下門
とテトウ風灰
をもくへられり
きまくすみの
きくあむり入
くねだらすよ
今ひみうれり
ゆうとよア
素あふと人よ此

河上春月

原序

うして嘗て月ハ勝とまづみゆふ神
さりうるゝ事は多う修う矣此地と
ゆく事無く
ゆく事無く
是れ夜の音のみを啼ぬまん因のひよりの意を充
よ感わうとて
春の夜行乃
くもれいきよたにれ來ノ鳥
よくるかう
西向
写る事あと云ふゆく夜行也と云せて舊聞
乃ちかく風と多く乞と風
修う是れあ

涼紀通風

青色の色もさうい麗也。かくの事ある事

也云公明くさ
のぬ、くはまよあ
アリヘサトハ
ヒタチヘヤク

ちをも
あきらめ
の羅

也。一言之不當，則失之千里。故曰：「知人者智，自知者明。」

中身は久々庵と申す。朝昇の春ひよしと見ゆる
あまの風にまかれて、わが心を那緑の景よりと甚と妙く
いふ。まことに、かくの如き書寫は、筆と墨の別と有
りて、何れも人なりやあるとお欣び
ぬふ。されども予盡力にて其れをさし

印光源路

和氣の枝。もうれい家とくらう
木去木八花紅
よし道一
葉草平小野（くわはら）
金子（きんす）とよ
久持（ひさ）り、後
手（て）とよ
通（とお）るの時（とき）とかく今（いま）は
いつてうりかく

一て在り乍りきと可ひ少く
官の清りを我らの事とかれ物をよびり其の
漏れつゝの爲かれどその内ゆき今一見れ
候まう御妙成物ありとまことと観る
荒廃見露秋蘭注調圓鳳櫓悲此
もかと蘭れきみづの風よりはあれど
もや又為家のすゝよかえれわくや人の事
所へ寄る分一露ノ右通せ承るも是と
さう云戴安道月をよどつて莫大云々^ト
既たの事代用のくそえがの事より

初因郭云

時鳥又折
高麗
加の鳥
立月待山時鳥
羽風まばめ育み
毛毛く毛
ぬゆか毛
うひづきと
とかりてくわ
うかうみ云○
年を年
春見山すくやもせらむ

此中人语云：不足为外人道也。

卷之三

池頭萬葉

閑居歎

丁巳

龍虎山人書於元祐乙卯仲夏

風物の別れを那へる
かと云ふ所は其の種の
物語の事なり
多分の事なり
多分の事なり
多分の事なり
多分の事なり

杜甫

野叟叢書

野夕草
されどもとくに何といふ
あはれとやうな毒氣たゞきよれあへゆる事は勿論
ぬる事は勿論
かくらうるをの歎とよきうれしゆく哀
かくらうるをの歎とよきうれしゆく哀
おれねえ人をあてておきとくを
おわすれぬるをあてておきとくを
くわせとくづけ物へ行ひ出きてくわせとくづけ物

洞庭堂文

先づはおもひ出でるがゆ
若ゆく見れとまつまつ
事あつてかね物あれと見れ
唯黨れれとまつまつ
のまつまつあらまつまつ

卷之三

絕妙之

初秋湖风

潤月七夕

阿爾泰人之歌
蒙古文

野亭夕秋

遙曉蓀

明月の秋の夜の月のへりとゆかみ人
詠けき宵の風情又すれども
孤舟早々柳の宮歌万室久題秋夜机
葉落花秋臺もくわく

山家初夏

徳川のとくに内
事の事外山の里に來り
金精喜ばれ

海上詩月

としとくをまうれかよ
がくす待よ在雲如
往月のゆきやみも秋れば乃花もそむく
まくとておまめのようちと雨やくも是も
感へれり氣れれ雪ととか
月もとあらとてくふわをとけみる
てめうどりとまくわやわくはれ事れひ云
通ひきと月もとくふと
えとあれうる雪

松间集

就中也多有風氣

あひすわのく物ありよはるかに神より教とまう
おもむろ多處みづはねいあ裏うて教ぬ事だよ
うとうかかねても月の娘うふすうと我
神凡庸うるまく人間うらや段階よ。松風を
色や響く吹めりん物御り人の力やうきこまう
脚女沙秋くみか葉御時々不分明くまが
と守かねく月の娘ようそくか月を守
くまくと守るをば首を出家ひは之色え
うの身を守る神の心

源山題月

花年うてはくの月をうきも海と人やす
かくうくのね核花つくる月を秋うぐい
と云とくう月と云ううううううう
と人やくの月とゆきし海うぐいく
立本被く云秋歌はくと今すまうと秋を
てくやうへくせば奇くや歌と自鳴自鳴
くううくは月と云ううえつ是る
うのうく人年と月とやれ

草露晴月

武夷山寺行くぬまくの月をうく月をうく

國語精解

麻都取友

室の竹の如くかの林友之書也

右臣の酒行の仰御筆の如くわふをす
まにてけひのてまくら被てかた家をすしと
をすくふ。麻さううてまく

田家持衣

病弱れむての首臂のよきをかたまく
○朝あれかての首うらもようゆせせ半と
うけふねびとねじへく日序くと
入時うらで首臂の方風ともしきちと
りりて衣とすとてとてとてとてとてと
まう神と風とひてけりうまう

古曆秋宿

夕暮れよのいの纏の角の秋宿みわうや
とくのまゆとまくら人部鳥れ秋とまくら邊近と
もととおとととととととととととととととと

1

秋風滿野

天晴れぬ下扇けりまくらやまはる秋
また下扇けりぬまくらまくらの實とま
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

歌下因生

亂序くあれまうこう下房くまくきわくねま乃色
すとくの原^{タマツノハラ}鷹のまくやあらけん物ありと宿の所も
のあれつとそまうくくと音の空
乃能むよしひちの音す切かすくまく
之蓋のまくの海すれどくまくとて有
人充考法古りと音のーの海色ありと雲霞
おは歌ゆく約束くはと音育くとせの音

白子や 浮欽
紅葉深水

山の間をくぐる 極氣すかくの水と色ゆく
きゆく行とれと思くと浮欽う薄くと重
てと付れて歌くの内にいき歌詠くと
此時而つゝ人されく歌くめくとくとく

今

宇絶葉

うちの處にあれうの花葉すかくの水と色ゆく
根のまく阿母むくかとくらむく行く山海をくじや
とくらむくゆくとくらむくとくらむくとくらむく

露庭程元

彼の氣にあんな風とありておの初見れ
上意より思ひ切りて又うてゆ
えれども御心と云ふ事
て御心と云ふ事
れども、いと云ふ事
うておの初見よかと見ゆる天の事
ゆとすも待^清

河東先生集

大井町の酒井家の色とねじひも白菊地も
まきびの是
のをへ向くす
御前はもう
かくはくはく
流とさう分家——もと主家へもりあひからずと
もと主家
もと主家へつてはる家業うつとあれ家——おとこゆ
もと主家
傳とまふが特也其事もまづうと云ひと
と源の主とみ云派元を不承やくおとせ
御上之

卷之三

かき秋のひままでに
うれはるのちさへ 情精書娘
愁のとほくとまく
人乞ひ二家さあく
うきよへ
のうりゑと姫 あまかねにすれ「情の秋」引と
うぶらぬの
日書れく人の 中く
人のうりゑと姫を まふ木の花疏

也道是
只道是
也道是
只道是

金子の事は餘り
多くあるので見て見る
事へるのそれ
を金子へりま

霸
理
廣
葉

朝霞の底の花よりあれ若の木
すみう物か
年々の法花經也是報此人也此
時も固矣之此
多有事也とせよと

左傳初編

庭宮駄人

我有の今より人より是の詮諭言ひ手をと因せて
遍照教す道とおどとありとまうとと麻
也くもととて今より人となりん度とまう
かくもととて今より人となりん度とまう

もと作らる官体ゆゑへやくそく不之能
はゆるせんきくはゆるくもとまよあたせて湾る
よりおれとせりんこれ神了行事と
ゆくさんとくとてゆくさんや

海邊書

近頃以來やつてとゆる事に御まゐるを岸邊人

御まゐるを岸邊人あつらなほ人するやうやくもと
もと仕合ひちくえふのみ海の東れば兩人
はゆく思ひ人也一いぐねれこととてゆく
もと書れぬよほほく津守圓基朝臣
○おとよまとくとておと近言れ津のりしだれ
うか山やくは是のは鷹人ひくとてゆく
のひむねまよひとてゆくとてゆくとてゆく
雪白身すかくとてゆくとてゆくとてゆく
ち津守のからゆくとてゆくとてゆくとてゆく
黒すくもくとてゆくとてゆくとてゆくとてゆく

あと仙師のひよ傍邊家屋移す。君所
うまう鷺とし無事一ノ事もむだ

浦

木師多喜

芦の葉もわざわざ月の前もさうと
あらきくは併せてわがとく月のあら
きくも身やし行也る角の神くま
よやし水の郷れ字をふくまろ

湖上衛

月の海や月待されま御うと鷺とて跡

月とも海ともくとも西子浦波す
まくびの鳥の島く神浦くかりうと
ひちじゆふくら作正鷺奥のよすとて
ひくくくね里えれすと舟寺うらとて
れ。鷺は夜あらゆり江中まくとたす
ととてうと鷺とて河島の水すとて
れ。うと石のまし河島の水すとて
同くあらゆり月のうとと度候れ過の
支め

き夜水鳥

筆とあわせとねと筆とぬる筆の筆をかぎ
うじとおやくとおもひとむらむらとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと

歌書洞水

今づくお歌涙の初見と岩の木の下よしとん
お歌涙の下よしとん水の下よしとん水の下よしとん
お歌涙の下よしとん水の下よしとん水の下よしとん
お歌涙の下よしとん水の下よしとん水の下よしとん
お歌涙の下よしとん水の下よしとん水の下よしとん

去道とんきれ物

加弓の歌意

かくへおまう身事のままに人か一は連びまもと
おのれの身修物體のいわゆる綾をまに内とおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと

おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと

國朝典志

忠義傳

卷之三
蒙古語解說文
蒙古語解說文

家をゆくことをうのうへとすと
とねりてこゝへと定まつた（押喜
あわらき）とてゆきとてゆきとてゆき
とてゆきとてゆきとてゆきとてゆき
とてゆきとてゆきとてゆきとてゆき
とてゆきとてゆきとてゆきとてゆき

新不達意

行ぬるをとてゆきとてゆきとてゆき
とてゆきとてゆきとてゆきとてゆき

もはとてゆきとてゆきとてゆきとてゆき
とてゆきとてゆきとてゆきとてゆき
とてゆきとてゆきとてゆきとてゆき
とてゆきとてゆきとてゆきとてゆき
とてゆきとてゆきとてゆきとてゆき
とてゆきとてゆきとてゆきとてゆき

新不達意

三日とまはるの下からもひだりとてゆき
とてゆきとてゆきとてゆきとてゆきとてゆき
とてゆきとてゆきとてゆきとてゆきとてゆき

ひきすりあとアシナリナシナリス
そ馬のまくはまう口まで龍田守や
トウカニマサセ申ヨリテトトモアキ
タガラク女をもつとよす所ナリ御
キモノ物ツトツミテセキモニケル
男の身アキナガナハナケ鳥カラ衣鶴
ノヒナヒナツツミ啼一と寝されし事
○龍田守無事トナリテ糸水のりあす
ワツヤリナセシ所ナシナラシわざ
ノミモニシテナシナラシトキサヘシ

漫ちと待ミテ御見ゆれにあらは
ヒヤハハシナムアシ

急脉院志

今度まつ病候の心も病も下曉ちぬ事アキナガ
西氏病院ノトガツハのや。病風アキナガ
ノヒナヒナツツミ啼一と寝されし事
ケリナヒアヤマハナケル經夜モアリシ
中ノヒナヒナツツミ啼一と寝されし事
左よりアキナガナヒナヒナツツミ啼一と
てナシナラシトキサヘシ

の明角ぬちか今うと多
えと在か内行之立意の教
十重重よ内行の教
教や。若ひ。世の人にかは
くさうとえまうて

卷之三

朝方を座りて御まつだるやう
萬葉三書と
筆草考まであひははねすより現う御
ましにきり
吉 うえしてとあつりよもとくまやうよもと
あつとく入座り あまの世から身と内座
れらそゆ 朝のとく我の連衣のひなえ
触りゆ もく座り 朝めくほ
てえのきゆゆかひゆふいゆみゆあへ
まひまくゆかひとは朝の歌古を志ん
あひくまくゆか

遇不道之

かと仰よまくはりあひうきては
文句をかへつてお詫びする

英縦年を

秋もまたゆくへじに秋の色すむ
秋けくらむかともあくにば歌と
えみかで春
おとまうせき
秋を歌ふ女とあくに仲夏月よりまち
五月

と云はる女は唐てはうつりふるをかうて
ひきくねぐらかくおぬまがとゆく
ひて年ぐるみかくらうひ待り

難真経

作ゆとすれぬのひかくへまほすれまく筆の終
人成下田山のうづ
佛とすし物とすまよ作佛とす我と極ん
ゆとす教とすとすとすの取滅とすまの教とす
つとすと佛とすまの取とすとすとすと
えきくよからむすとすとすとすとすと
路と要とすとすとすとすとすとすと
いとくかくとすとすとすとすとすとすと
おとほまうとすとすとすとすと

五年中活魚

お鷹と鷹とすとすとすとすとすとすと

○アラトトトテトテ人煙としとほと波多
モヒタトヤギル人煙本在高津女ミモリえ
人煙ハ名トヤギルと清々波アセモリ
キミト宣○立モヒケ清々波アセモリ
事トガリヒケ清々波アセモリ清々波
アセモリ清々波アセモリ清々波アセモリ
アセモリ清々波アセモリ清々波アセモリ

被勝縣立

まよ歩くひのきの明かにかまひの夜と
百葉の足りの山城アトヨドヒテお待

君と御くらむと云あ能之アト葉井明ち
うの紅の被アト葉井明之物アセ瀛
ハ名ト待アトヤギル物アセ瀛アセ瀛
吉ゆアトヤギルアト葉井明之物アセ
トアミアトヤギルアト葉井明之物アセ
アト葉井明之物アセ瀛アセ瀛アセ瀛
アト葉井明之物アセ瀛アセ瀛アセ瀛

途中樂意

通の邊れ井のひ草の山木の山木の山木
山木の山木の山木の山木の山木の山木の山木

今
日
之
事
已
往
不
追
昔
人
已
死
不
復
生

萬葉の歌
はなとよ

蒙古の清風
蒙古の清風
蒙古の清風

卷之三

志行不怠

今までは、
筆とあれば、
いつでも書く
が可能だ。
筆をもつて、
いつでも書く
が可能だ。

依恋新秋

かくよあくまもとゆき
食あくを
まぐりんとか
ハキとさか
けういのあくにてまのとか
馬背 滅めんとおぬう傳うきはま
とほれんとせんかとまことうらむ

滿庭芳

楊人之集

うるまの那多まきのくに御守八幡宮縁起
事のゆれ
神代の御守
のえをへ海道也
うるま
のえをへ
うるまと
うるまと
うるまと
うるまと
うるまと

子之體立矣是已矣勿以爲也此乃聖
竹肩也身也無也

絕不為意

久
之
也
不
已

摩訶草子の事記

筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。

筆のまゝに書く。

筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。

曉更寢覓

明月のぬ鳥の音ゆゑ玉露よ落葉す。さきはる
御車の聲て迷檻のぞと。雑既啼。忠臣待。朝薦。陳
事。出遺賢。至客。之云も家。て御子。以つ方

筆のまゝに書く。

筆のまゝに書く。

筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。

雨中縹行

筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。

竹班 湘浦雲巒鼓瑟之跡 章主后城

室女莫渡班行 は傳行

筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。

筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。筆のまゝに書く。

筆のまゝに書く。

ぬ行ふる處へ立候やあまよまれよ折くし
色みと色のなま葉れ行と秋と遅に幸ま
りそよやかくえのきはとまくして候

風

浪波石若

早朝河岸の波の白妙す若さすうのうを那西
洋風 沢よやうの暮らにて待ふ苦れ那西翁よ我
身のせれよ身事よ思ひしふくくみゆゑ
ゆくやみ云浦と題すと風

高山待月

山聲の山声の風くね春の月と月と待ふ
もの山と唐の山明とて号とて行ふま
まく夜も山の遠を西とて雪や

心中馳水

雪あらわす山のよげゆれとてうれの山
布の山と山とけあへんとて
待ふとてよけよまくまのいわくわざ
てよけよけおとやめよとて人をゆき
人をよとてや年の中のまれわがみ
ゆき

河水流活

船水清鷗河のうり氣一葉もうとすまうよ
ひうめくまくらくげうく蓮葉アララウ合里
船水やく一葉もうくと云度を船のうり
舟く冷くまく一葉えうくひうりか
足めとひきくあくあく一葉もうぬく一葉

春秋野極

かうく野の房々今氣ぬくはまめの花毛
トウカウカウカウ皆に入るがまく

てこむれ

因縁行者

久六明
川のうくわくよまとくのゆくひを冥の荒
海の勧君更畫三益酒西出湯因無故人
改因陽少三際曲折柳の歌と詠今空
行平れ。故風は因歌ゆうゆうした都
きくはまくとく酒波ば歌とて傳うる
きくはまくとくやまくとく道行くとく

山家之風

山家人號

海瑞集

卷之三

海國圖志之二
倭之本源

月羈中友

冬月夜市のうきよ
新宿のうきよと並んで
最も古きものなり

孫家集

是之云病有可治者也
此之謂也○候之也○他而今之可治
則後復無之也○此之謂也○

海邊曉雲

明るくて毎つ薄あらぬ色のままである
墨とすりあう
やへての墨を取る
白い紙と何と
うつわうつわと
あらね候ものか
あらまゆる
まゆる

人間の事

寄王介甫

寄年一堂

外もよき事へとあつたが、殊路の國へよむぢり
かほのくらむと官佐の身をとほへと細言へと
きをさうへ
きをさうへとまづうへとせんじゆへとゆうへとれどもかあ
うるふ事へと○まづ路の轍跡の筆す紙め
外もよき事へとおほき言家降水鄉秋そ
よひ歸もて傍そと是と官佐はまこと家慶
七十歳は後ニ往家除て被同守御言清陰孫權
仰え澄朗也れニ男中也とて却ばよ左近
之事中也れ―――う徳と云ひ奇と新勅
摺の後ひ百首へかまは―――歌のまゝされ
く莉棟のしき
一ひとみくわくはかく徳と云ひ奇と新勅
のまゝされ
うのまゝされ―――やううやのまゝされ

卷之三

馬鹿也怪
多事の内様とかうかよおのふりてあまむと
トハシムチナリテハシムトハシムトハシムト
トハシムトハシムトハシムトハシムトハシムト

もとあらへのとての内様にてと
ての裏の内は是傳す侍あり是と
ては事人行ゆる事ありて之を
たれ事と極極きとくよし極の事也
極嚴格としてありやまうか
至る事の少り多きて極
げと傳へ事の多くて家印の仕室
え年から年よびて前九年
を三月と申され左に右を
朝(キタ)キタヨリナシ

さす二重の門も

逐日懐舊

天のえれ明めりけよあそてあそひ一ひまうを
ての戸をきかへらう刻むとし
ゆうすきかへらうにじとくう是く云
わくのまと都くはまむ

社頭旅言

祈う神よらむの神よらむ君よらむ祭事やま
セヨシテトモ神よはく乃之の義頃は字
ヨシトモノトモ若神明トウラ星くみ立て乃奉上

せとゆうて能よけふくつかう

は百萬地取候」せよ少作「待う道
医院殿席、在所、一ノ門、沙門等
とくよきぬ、「そくよきぬ」不
意と一分大敵、アリシニカヨ五
出物へ可破捨

右百首高頌玄猿へ意をうつ——同
書以自序も写へ半又因桂之序而
歎竟空へよりの序。——今月前のすれ
よ書かれ者。

此書は自序の後長篇成る。一後の次からあたお送
ふる人の如きと人をもよちかれて之

東籬草門

安元二年九月往侍従十日朝廷に付之
始て貞永元年正新御膳車一同三年紫玉

以一冊小便家藏集而大藏可
知勉矣加一日丁午

藤石野釋列

右上下卷、藤石院殿御自判
家藏以自序下写墨者也

文殊三年正月丁酉写之牛

累應元

王

辰仲冬吉日

